

大学講義で若い世代との交流を経験

作家の後藤正治さんが教授に就任した神戸夙川学院大学で4月27日に彼が担当するクラスでグローバルコミュニケーションについて講義をする機会があった。この大学は「21世紀の観光産業を担うリーダーの育成」を目的にこの4月に新設されたばかりで、現在は観光文化学部だけとのこと。「一部の学生が途中居眠りしたり、あまり熱心に授業を聞かないことがあるかもしれないけれど、気にしないでください。」と依頼する彼も少々不安顔であった。しかしながら予想以上に活発な授業を展開でき、私自身が若い世代の人と交流でき勉強になった。以下主なポイントを紹介したい。

私は「学生が自ら考え、発言する授業にすること」をクラスの目的とした。そのため、講義というよりも、ワークショップスタイルで進めた。講義形式に配置されている机に座っている学生にお願いして、4つのグループを構成した。最初に与えたテーマは「国際的に通用するコミュニケーションとは何？それを実現するためにどのようなスキル・能力が必要か？」をグループで話し合わせた。さあスタート。

学生はなれない様子でぼそぼそと話し始めた。しばらく経ってグループを順番に訪問し、様子を伺った。最初のグループは女性だけのグループ。「こんにちは、まず挨拶。女学生も元気に「こんにちは！」と応える。ある学生は「先生、私はXXちゃん。そう呼んでね」とニコニコしている。そういえば後藤さんも、何人かの学生をファーストネームで呼んでいる。

この女学生の一言は学生の側から、講師である私を彼女たちの側に引き寄せ、私との距離をぐっと狭めた気がした。15分ほどが経過して、各グループに意見を求めた。「言葉」「ジェスチャー」「音楽」「美術」「顔の表情」など、次々と意見が出た。「音楽」は私の感覚では、決して出てこない意見。「顔の表情」も確かに国際的に十分通用するコミュニケーション手段だ。

「自分の意見をしっかりと表明すること」について

次に「上司からの依頼にあなたはどうかたえるか？」をテーマに議論した。与えた事例は「外資系企業の開発部門での話。アメリカ本社の開発担当副社長が日本を訪問中である。上司の開発部長から「来日中の副社長を明日、京都観光に案内してくれないか？」と頼まれた。そこで、頼まれたNさんは「すみません。あいにく明日は研修に出席予定のためダメです。」と回答した。それを横で聞いていた同僚のMさんは「Nさん、上司からの依頼をそのように断ってはだめよ。私ならハイと二つ返事で快諾するよ」とアドバイスした。」そこで質問「さて、あなた

が同じ状況にあったとすれば、どちらの立場をとりますか」と2者択一で学生に尋ねた。やはり、若い学生でも上司の依頼は断らないというMさんの意見に賛成する人が多い。その時、どちらにも拳手しない学生がいることに気づく。意見を聞くと、「その上司に、別の日に研修を受けさせてくれるかどうか、まず質問します。もし可能なら、Yesの返事をするし、無理ならNoの返事をします。」と第3の回答をしっかりと述べてくれた。

そこで、「欧米の社会では、自分の意見を述べることは許されるのだよ。」と解説。続いて「日本人が教室や会議の場で、発言を控えるのはなぜだろうか？」についてもグループで議論してもらった。「君たちが小学校の低学年の時にどうだった？」「多くの生徒が手を上げたよ。」「いつから手を上げなくなったの？」「小学校の4年から5年ぐらいから。」「どうしてあげなくなった？」「目立ってはだめだから」「なぜ目立ってはだめなの？」「目立つとほかの友達から変な目で見られるから。」「いじめられるから。」もともと活発な小学校の生徒たちが、高学年になると、活発さを無くしてゆく。

小学校高学年における生徒のこの変節(まさに価値観の変節)に教師たちや大人たちが向き合う必要がある。大人である私たちはこの「自分の意見を述べる」ということにはどのような態度をとるのか？「教室で活発に自分の意見をしっかりと述べる」ことを「是」とするのか「否」とするのか？大人である日本人の私たちは子供たちに伝える明確なメッセージを本当に持っているのだろうか。民主主義において「適切に自分の意見を主張すること」そして「自分の意見を主張する場合のルールを学習すること」がいかに大切かを子供たちに伝える必要がある。

最近コミュニケーションに関するある英文の記事を読み、「人間が人前で話すことを苦手とする」のは程度の差は確かにあるが基本的には万国共通のことであることを知った。しかし問題はそのような現状に学校や職場において私たちがどのように働きかけていくかどうかということだ。アメリカでは「どのような環境のもとで人間は自分の意見を述べ易いのか」を社会心理学者たちが研究していること、そして企業もその成果を学び、実践する努力をしていることに気づく。

編 | 集 | 後 | 記

授業を開始する前に、このような活発な意見を学生から得られるとは予想していなかった。数人の学生の目は真剣そのもので、輝いていた。「意見を述べさせる」ひとつの実験ができた。小グループにクラスを分割した。学生と講師との間に距離をおかず、学生の目線にまで降りていった。分かりやすい言葉で、学生に質問し、また学生からの意見を真剣に受け止めた。学生からの回答が的確であるときは褒めた。野尻